

ひまわりからの メッセージ

92号

2019. 2. 18.

NPO ひまわりの花内
西濃圏域

発達障がい支援センター

発行人：中野すみ子

こと 言の葉は



三寒四温と言われますが、地球温暖化のせいでしょうか、雪も余り降らずにこの冬は終わろうとしています。庭先には黄の水仙がつぼみを含ませ、クリスマスローズが咲きはじめ、春の足音を身近に感じようになりそうです。

卒業式まで、あと一ヶ月程となり、新たな旅立ちを迎える子どもたちは、今、どんな思いでいるのでしょうか。

私たちの時代、卒業式の歌といえば、「螢の光」でしたが、今はどうでしょうか。そういえば、ふと思いついたことがあります。二番の歌詞は、「とまるもいくもかぎり」とか「かたみに、おもうちよろずの、こころのはしを、ひとことに、ヤキくとばかり歌うなり」ですが、漢字で書けば、「互に思う、千万の……、幸くとばかり……」となります。ある時、「ヤキくとばかり」が、「先行くとばかり」と書かれていたことがあって、誤りと言うこともできます。「平仮名に書かれてはどうか」と言ったことがありました。遠い昔のことです。この曲は、二番までだと思っていました。実は四番まであり、三番には「ひとつに尽くせ国のため」、四番には「千島のおくも沖縄も八島のうちの守りなり」（原詩は平仮名かもしれませんが）があって、明治の頃の考考方は現在の沖縄に読んでいるのかと改めて思ったことでした。

歴史は移り変わり、ことばも又、変わっていきます。新しいことばが生まれ、その陰で消えていくことも多いのではないのでしょうか。先述の「幸く」にしても、漢字で書かれなければ、歌詞の意味さえも伝わりません。おそらく日本人が昔から大切にしてきた微妙なニュアンスのことは、今後は消えていくのではないのでしょうか。

昔は一歳児のけんかだった押す、叩く、髪を引く等、ことは、言葉のないが故の止むを得ない意思表示だと思っております。昨今の様子を見ると、小中学生のみならず大人にも表現する力の弱さが見えます。使われずに消えてゆくことばもあり、知っていても当然と思ってしまうことばも使われなくなると、人と人をつなぐものが益々細くなっていくような気がしてならないのは、私だけでしょうか。短かいことばや絵文字の便利さに流されずに、日本語のもつ美しさを忘れたいと思っております。

子ども達の未来を



担っていく責任を亡心れずに。

〜引きつぎ会で思うこと〜

この時期になると、毎日、引きつぎ会があります。園から小学校へ、小学校から中学校へ……。しかし、毎年、どういふつもりで先生方は参加されるのだろうか……。この時期になると、疑問に思うことがあります。そこで……
ついに、言ってしまったリイのです。

引きつぎ会は、実践報告の場ではないのです。

四月当初は、「さだったのですが、今ではさになりません」といふお話があります。例えば、「トラブルが多かったのですが今ではほとんど見られなくなりました」といふお話から、それは結構なことだと思えます。しかし、その変化の過程で、担任の先生がどの様な支援を行い、どの様な関わり方をしたことか、どうなったのか、そこが聞きたいのです。担任の先生は、「私は上手くやって来ましたが、おっしゃりたいのかもれませんが、担任が代わり、環境が変わることで、もしかしたら元の

状態になってしまいかもしれません。だからこそ、良かった支援と、まずかった関わり方や、ことばのかけ方などを伝達してもらいたいのです。

特に発達障害の特性をもつ子どもたちは、その特性ゆえに間違っただけを責められると、二次障害になったり、もっとこじれると、取り返しのがたない事態におちいります。お話を伺いながら、担任の先生の理解度も垣間見えてしまいます。引きつぎ会は、保護者の方が家庭では見られない集団の場での実態を再確認し、今後の子育てについて考えていただく場でもあります。

お子さんの長所や強み、育ってきた力と同時に、今後の課題もしっかり伝えたいと思います。うちの子の良い所だけ伝えたいという保護者もいらっしゃるでしょうし、必要以上に吾が子を守りたいと思っておられる方もいらっしゃるでしょうが、そこは、私達はプロとして、三年後、五年後を見越してアドバイスをしていきたいものです。

合理的配慮を、はきちがえないで!!

園で加配の保育士や支援員が一对一対応されている場合、引きつぎ会にクラス担任ではなく、一对一でかわっている方が出席されることがあります。そして、日々の支援を話さ

れ、「うしろにいた方がいい」と要望までおっしゃることがあります。私は耳を疑います。「この子は通常学級で学ばれるお子さんではないのですか？」

引きつぎ会を「要望の場」と取りちがえている保育者の方が少なからずいらっしゃいます。園でやってきた支援を同じようにやって下さいと言われては、学校もお困りになるでしょう。合理的配慮というのは、何でもかんでも要望通りにすることではありません。保育士の方が会の場で言われれば、保護者の方は、当然やってもらえると思われがちです。もし、できない場合は学校への不信につながります。園では、よくしてもらったのに、「…」ということは、避けたいものです。

チェックリストは何のため？



サポートブックには、検査結果やチェックリストなど、子どもさんの実態を表すさまざまなツールが綴じられています。サポートブックの名称も市町によって様々ですが、西濃の圏域ではスマイルブックやレインボーブック等と呼ばれ、「途切れない支援」のために作られました。

さて、そこに綴られたツールは、子どもたちを理解するため大切なものですが、時々引きつぎ内容とチェックリストが矛盾していると思ってしまうことがあります。OCLなどでチェック

れた項目は、本来はその子の困りを表しているはずですが、そして、その項目については、何らかの支援が行われてきたであろうが、担任の口から話されること、チェックリストでチェックされた項目ではないこともあります。

本来、OCLMやOCLなどは、担任の先生が一人でつけるべきものではなく、各々の園で話し合われているはずのものです。やはり、引きつぎ会の前に、もう一度見直す必要があるのではないだろうか。

端的にまとめる力 ↑ 子どもも理解

十年前とちがって、担任の保育士さんたちは、おいぶん上手にまとめて話される方も増えてきたように思います。でも、まだ、だらだらと何が言いたいのか、お子さんの姿が見えてこない場合もあります。きっと緊張されているのかもしれませんが、次のようなまとめ方を覚えてはいかがでしょうか。

まず、お子さんの興味、関心のあること、長所や強みと考えられることを二、三あげていただく。その次に自分として気になっていること、課題と考えていることを何点かあげて、それに対してどの様に支援してきたのかを具体的に話して下さいと思います。

おそらくこれは、小↓中学校への引きつぎの場でも言えることだと思います。特に気持ちのコントロール等の場合、別室を用意したと言われても受ける側に、そういう環境を用意できないこともありますから、保護者同席の場で話し合っておく方が良いでしょう。学習面のことしか話されない方もありますが、その困りが何に起因しているのか、分析された結果も是非お伝えいたきたいと思います。単に「書くのが苦手な子です」というだけでは、次の支援が見つかりませんか？

家庭でできることを



保護者の方にも色々な方がいらっしゃいます。園や学校から強く勧められたのでサポートブックを作ったが、心の中では必要ないのではないかと思っている方もいらっしゃるでしょう。子育てに悩んでいる方もいらっしゃるでしょう。私は、そのお母さんたちも、その子育てを応援していく必要があると思います。そして、学校にお任せではなく、家庭でできることは、家庭で……とふんばって下さるようには手助けができません。良いなあと思います。

入学の時は心配でサポートブックを作ったけれど、学校での勉強もそこそこ出来るようになったし、担任の

先生からも、「大丈夫じゃないですか」と言われたので小↓中学校への引きつぎはやめますという方もありました。でも……AさんやBさんは、義務教育終了後にサポートブックが必要なのに……

何度か「勉強ができるので……」というところで判断しないで下さいね」とお願いしているのですが、結局は成績で判断されることが多いのだなあと思います。

大人になって生き難さを感じて相談される方もたくさんいます。その方たちに、高学歴の方もたくさんいます。もっと早くに自己理解されていたら違っていたんだろうなと思うこともあります。

まずは、周りが理解すること、そして御両親が理解すること、それが本人理解へとつながっていくのはじめて自立への道が開けていくのです。

家庭と園や学校は車の両輪だということを常に考えて、協力体制をとって下さると信じています。まあ、引きつぎの会。子どもたちの大切な未来を担っていく一人として、厳しいことも言わせていただきますが、お許し下さい。

三月例会は、川上ちひろ先生の講演会です。

3/11 九時三十分開始・ソフトピアジャパンセンター10F